

東南アジア旅行の報告

京都大学総長 平 沢 興

今日ここで、東南アジア研究について特にご関心の深い皆さまのお集まりの席で、岩村教授にご同行を願って視察や連絡を行って来たこのたびの東南アジア旅行についてお話しする機会を得ましたことは、大変ありがたいことであります。旅行の日程は、ただ今岩村教授からお話しがあった通りであります。

なによりもまず、私は旅行中終始変りないお骨折りを戴いた岩村教授に対して、心から厚くお礼を申し上げます。また旅行中いろいろのところで、いろいろのお方にお会いして、数々のお世話になりましたことは感激にたえないところであります。

なお今日ここではからずもお会いしたのでありますが、荻野君にもバンコックで非常にお世話になり、甲斐君、工藤君、などにもまた、会ってお世話になりました。

バンコック、ラングーン、クアラ・ルンプール、香港など各地の大使または総領事を始め、館員の各位にも短日の滞在にもかかわらず、いろいろ心のこもったご心配をいただき、暑いことは大変に暑かったのではありますが、旅行全体としては、たいへんありがたい旅行でありました。特に強調したいことは、自分で出かけて大変よかったという実感であります。このたびの旅行は短い時間であり、しかもその大部分は飛行機とか自動車に乗っておるというようなことで充分プライベートな時間をも持って考えると、味わうということは出来なかったのですが、それでも不思議なものでただ現地を車で走っただけでも、日本で本を読んだだけでは、とてもピンとはこないあるものを掴むことができ、本だけで考える十数倍もの効果があったと思います。やはり行ってよかったと、今にしてしみじみと私は思います。時間の関係もありますので、あまり細かなことをくどくど申しあげることにはやめて、総括的に、結論的なことだけを申しあげます。

まず、なによりも私がうけたなまの印象は、こんなことにびっくりしては恥ずかしいのですが、東南アジアというふうに言葉でいうと、いかにもこじんまりとまとまっておるように思われますが、決して言葉でうける感じほど狭くはなく、またまとまってもおらず、現在もなお、現地はまったく激しい変化の中にあり、この激動の中でそれぞれ遅しく明日の国づくりに懸命の努力をしておるということでもあります。タイ国は、東南アジアの中では、ご承知のとおり、

もっとも安定したところと申してよいかと思うのでありますが、そのタイ国に現在の革命政権たるサリット内閣ができて僅か5年であり、ビルマの革命政権たるネ・ウィン内閣は僅か1年5ヶ月前であり、更にマラヤに至ってはご承知のとおり、目下マレーシア連邦をつくるために切角努力中であります。マレーシア連邦のことなどは、日本の新聞ではあまり細かく出ておりませんが、もちろん現地では大変な、国の運命をかけての大きな仕事であります。マラヤのラーマン首相は一方ではインドネシアのスカルノ大統領、フィリピンのマカパガル大統領、他方ではイギリスおよび国連などを相手にして目下交渉中で、はじめの予定ではこの8月31日にマレーシアをつくりあげたいという希望でありましたが、これはもう不可能になりました。きのうの新聞をみますと、果してマレーシアができるか、できないかに就いてやや悲観的な言葉さえも書いてありましたが、私は詳しい歴史的、政治的背景などをよく知りませんので、この問題の帰結というようなことについては確言はできないのであります。しかし現地の新聞を読んだり、この問題を大局的に見ますと、前途にいろいろの困難はありましようが、結局はやはり出来るだろうというような感じであります。

国連のウ・タント事務総長が動いたり、イギリスがその構想に賛成したりしているということは、この問題の肯定的方向を暗示するように思われるのであります。私はマフィリンドなどという言葉ができた如く、マラヤ、フィリピン、インドネシアの三国が、自主的な話し合いによって、平和裡に、かつ建設的にこの問題を解決されることを祈るものであります。

以上のように、このたびわれわれが訪ねた三国、すなわちビルマにしても、タイにしても、またマレーシアにしても、まだ正しい意味での国づくりが完全には終ってはおらず、いわばまだ国づくりの最中であります。私は、そういうふうな激しい息吹きと申しますが、とにかくそういうものに胸をしめつけられるような感じで、帰ってきたのであります。百聞一見にしかず、などと申しますが、この度の旅行では、しみじみとそう思いました。こんなことはわかりきったようなことではありますが、私は欧米の旅では、実は最初行ったときから、それほどには感ぜず、このたびの旅行ほど驚いたことはありませんでした。

しかし、このたびの東南アジアの旅行は、わずか二週間ではありましたが、私の人生に何か一つの大きな変化を与えた、と申してもよいような感じであります。もっとも更にひろく考えれば、激動しておるのはただ東南アジアだけではなく、この世紀は世界全体が激動しておるとも言われます。たとえばヨーロッパにおけるEECの問題、アフリカにおける諸問題、西アジアにおけるアラブ連合、また米ソの問題など、問題は無限にあります。現代は、一国の、あるいは民族間の分裂と結合とが相からみあって行われている時代ですが、これは一面の地球の狭小化、人類全体のデモクラシー化の方向などと無関連な問題ではありません。とにかく激動しておるのは決して東南アジアだけではありません。しかしこの中でも、世界的に見て、東南アジアの激動は最も注意すべきものの一つであり、また日本としては最も関係の深いものと思います。

なお、東南アジアをまわっている間にひしひしと感じたことは、固定した日本的の感覚、日本的のものさしだけで、ものを見てはならんということでもあります。例えば、この二三十年だけの日本を見ても、日本には 5.15 事件、2.26 事件、安保騒動等々というような、いろいろの事件がありましたが、ただこれを日本的に見、日本の物指しだけで計っておるのでは不十分なので、もっと落ちついて世界史的視野をもったものさしで計って見ねばならんと思うのであります。5.15 事件、2.26 事件、安保騒動などは既に過去のこと、現在とは何の関係もないなどと考えると大変な間違いで、そういうものを起した根元的な思考とか、性格とか、社会的事情などについては、なお今後も考えねばならぬ数々のことがあると思います。幸にも日本はいろんな困難をのりこえては来ましたが、しかし、その日本としても鋭い目でみれば、決して、ただ安心しきっておれるような状態ではありませんまい。むしろ、今こそわれわれは日本の置かれている現実そのものをしっかりと掴み、ただ政治家だけにまかせず、われわれ自身それぞれ国民の一人として、まじめに正しく対処して行けるだけの自信を持たねばなりません。東南アジアを見に行き、私は日本はこれでいいのかというような妙なことを、あるいは妙なことはないかもしれませんが、とにかくそういうことをも考えずにおれぬような気持で、帰ってまいりました。

タイ国では、バンコックの大使館で、島津大使を始め多くの方々にお世話になりました。殊に島津大使は岩村教授とも旧知で、いろいろとうちとけてお話しも承りました。バンコックで訪ねた大学はタマサート大学、カセツァート大学、チュラロンコーン大学の三つで、もう他に二つあるとのことですが、これは行きませんでした。

大使館で話を聞きますと、タイ国では研究、とくに外国との協力研究については、文部省は殆んど関係しておらず、これは National Research Council が責任をもっておるとのことです。私どもはそれと連絡をとることにしました。National Research Council の会長はサリット首相であります。実権をもっておられるのは、事務総長たる ネー中将、(Lt. General Netr Khemayodhin) であり、ネー事務総長の下に人文科学系の主任として、ニボン博士 (Dr. Nibondh Sasidhorn) がおられ、自然科学系の主任としてプラディット博士、(Dr. Pradisth Cheosakul) がおられますが、これらの方々とは一緒にお会いしました。ネー中将を始め、何れも実に理解のある方々ばかりで、私はわれわれのためのみならず、本当にタイ国のためにも、こういう方々が国の研究面の責任を持っておられることを、大変嬉しく思いました。特にその中でも人文系の責任者たるニボン博士には強い印象を受けました。Nibondh と書いてニボンと発言するのだそうですが、私は始めニボンといわれた時は、どうも聞きまちがいはないかと思いましたが、そうではなかったのであります。実は相当のお年だろうと思うておりましたら、後で 32, 3 といわれたようで、まだ独身であります。いずれ結婚したら、ハニムーンは日本で送りたいなどと、じょうだんを言っておられました。ネー中将にしても、ニボ

ン博士にしても、またブラディット博士にしても、東南アジアの研究に対しては非常に熱心であり、協力的であります。ここで私が言ったことは、「われわれアジア人は、遠いヨーロッパとかアフリカのことは比較的知っているが、残念ながら兄弟分たるアジアのことについては、おたがいによく知りません。これは、いやしくも文化などということを口にする以上は、大変おかしいことじゃないでしょうか。そういう意味からも、われわれアジア人はたがいに手をつないでアジアのことを研究し、たがいに尊敬しあってますます友情を深めましょう」というようなことでありますが、これにたいしては、深い共感を示してもらいました。

尤もこれについては、タイ国のみならず、どこでも、「そんなことはつまらん」というようなことをいった人は一人もありませんでした。その時の様子は Bangkok World, Bangkok Post などの英字新聞およびタイ語の新聞などに出ておりますが、Bangkok World の記事は、次の通りであります。

Japanese Profs. Visit Bangkok

Dr. K. Hirasawa, President of Kyoto University, and Dr. S. Iwamura paid a visit to Lt. General Netr Khemayodhin, the Secretary-General of the National Research Council at the Government House last Monday. They have come to Thailand to find the possibility of cooperation with Thailand in facilitating the research programs of the Center for Southeast Asian Studies of Kyoto University. President Hirasawa also requested the National Research Council to send some Thai scholars to observe and exchange experience and ideas at Kyoto University on their invitation.

"We, in Thailand, realize the increasing role of Southeast Asia in international affairs and are interested in encouraging intensive studies of Southeast Asia," said Lt. General Netr.

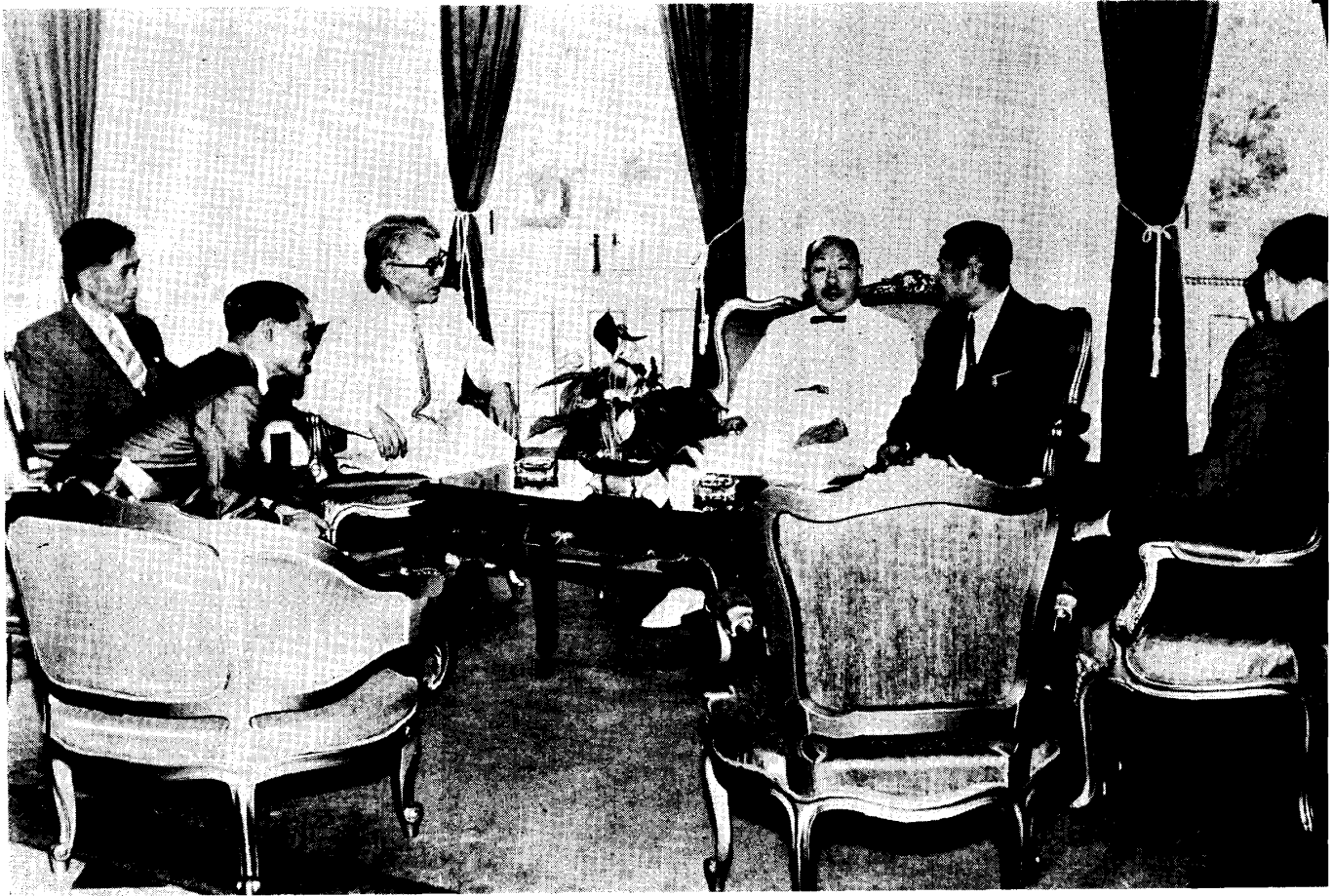
Before leaving the Government House, President Hirasawa told the Secretary-General, "Even though I have seen Bangkok only for one and a half days, I am greatly impressed by the wisdom of the Thai people in maintaining their cultural originality amidst the rapid modernization. Bangkok has the unique harmony of old and new. This is the pride and the promising sign for future of Thailand."

なおニポン博士からも、おととい大変ごていねいな日本文の手紙がきております。この手紙には、特に新しいことは書いてありませんが、しかし、私が今まで申しあげたことを、ニポン博士自身で確認しておられる所に意味があります。ニポン博士は、アメリカで学位をとられた方で、からだは、私よりも小さいくらいですが、ものの五分も話しをしておると、ほれほれとする落ち着いた味のある方であります。ひとつニポン博士のお手紙を読んでみましょう。「ご来訪いただいて、まことにうれしく思います。先生は、ご経験が多く、ご親切で、東洋文化をよく理解されていることは、われわれに深い印象を与えました。短時間の会見ではございましたが、一生忘れられない喜びでございました。この手紙により、京都大学の東南アジアセンター

のご計画に、大いに協力することをお知らせします。一緒に送りましたのは Government House で、National Research Council 事務総長のネー中将と会見されたときの新聞ニュースでございます。ご覧の通り、かなりくわしく、はっきりしたニュースでございました。Bankok Post, Bangkok World という二つの英語日刊新聞のほか、多くのタイの新聞にも出ていました。最後に岩村先生に、よろしくお伝え願います。」

National Research Council の方々におあいしたのはバンコックへ到着後一日半のことでしたが、バンコックのパゴダなどに深い印象を受けておりました。そこで私が「たしかにバンコックには、まだ独創的なものが残っています。この独創的なものが残っておるということは、いろいろの歴史の流れのなかにおいても、自らを喪わずにきたという証拠であり、このことは、タイ国文化の将来を約束する極めて重要なことだと思います」というようなことを申しましたところ、これがタイ国の方々の気持ちにぴんと来たのでありましょうか、ニポン博士が新聞に出されたのであります。

さてビルマのほうであります、ラングーンには、八月一日にまいりました。ところが、ここは岩村教授が前回おいでになったときとは、政治的に非常に事情が違っており、共産系との和平公渉のため、政府の全閣僚がもう一ヶ月もラングーンをあけておるというような緊迫した状態でありました。こういう事情は出発前、外務省でもよく分りえませんでした、これはビルマが嚴重な報道管制をやっているためであろうと思います。たまたま私共が着いた晩、外務省から小田部大使の方へ返事があり、いまは重大な国家的事件—和平交渉とは書いてありませんけれども—があり、且つ予算提出期で緊急解決を要する重大事があるので、大使から申込みのあった京大提案の問題についての交渉には、不適當の時期だというような知らせがあったのであります。しかし私どもはそれはそれとして、事前に了解を得ておった予定の通り、文部次官、農業局長、ラングーン大学の学長などの方にお会いいたし、こちらの研究の主旨を申しあげました。この訪問によって、私共はビルマ政府内には、われわれの問題について横の連絡が全然なかったということが、分ったのであります。それは外務省からの大使館に対する回答が否定的なるにもかかわらず、文部次官、農業局長、ラングーン大学長などの態度は、すべてわれわれの申し込みにたいして、極めて積極的であり、協調的であったということでもあります。特に農業関係の研究に対しては、農業局長は、「自分はまったく貴学の研究には大賛成であるし、それは、いずれはどうしてもやらねばならぬことばかりである。しかし、最後の決定は、ハイレベルで行われるのであり、この最後の決定については私は何も直接力をもっていない」というように、極めて卒直に、はっきりともの言っておるのであります。農業局長はただの役人ではなくて、農業方面についての知識を十分もっておる人で、話の焦点もよく合い、おおいに感心しました。個人的見解だという注釈をつけながらも、氏はビルマの農業がまだ劣っており、農業政策としてもまだやらねばならぬことが非常に多いというような、筋の通った話を



バンコックのタイ国首相官邸にて

右からプラディット科学研究会議自然科学部長，
ネー科学研究会議事務長，平沢京都大学総長，
岩村京都大学教授，安藤在タイ日本国大使館書
記官，ニポン科学研究会議社会科学部長

しておりました。

文部次官は、もとラングーン大学の教授をされた方だそうで、私共と話がぴったり合い、東南アジアの研究はどうしてもやらねばならぬことであり、出来る限り、京大の研究にも協力しようということでありました。ラングーン大学長との話については、大学の思いはみな一つで、協力をおしまないということでありました。

マラヤのクアラルンプールでは、マラヤ大学の総長は見えないので、副総長に会いました。研究にたいしては、もちろん協調的でありました。なおこの大学は現地の教授と外国の教授とが、ほぼ半々ぐらいだが、むこうからも教授の交換などについて話がありました。

この大使は大隈大使で、いろいろマレーシア連邦などについての話などもありましたが、特にお伝えするほどのことはありませんでした。

香港では、われわれの訪問を本学の卒業生が聞きまして、現在香港にいる二十数人の卒業生が、ほとんど全員集まって、着いた晩に歓迎会を開いて、いろいろ話を聞かせてくれ、大変嬉しうございました。香港大学のほうは、休暇中で総長が不在であり、その代理にも時間的の都合で会いませんでしたが、しかし、教養部の尾崎助教授がおられましたので、いろいろと現地の事情など、承わることができました。

結局、全体の旅行としてまず感じたことは、現地については、現地でなければなかなか正確詳細の情報を入手し得ない、ということであります。先程も申しましたように、タイ国も、ビルマも軍政で、聞くところではいずれもまだ戒厳令下にあるそうであります。もっとも戒厳令下にあると言っても、何もかもが、それ程やかましいというのではなく、われわれは戒厳令下にある、というようなことを、直接肌で感ずるようなことはありませんでした。しかしある方面ではやはり厳しいので、特にビルマでは、新聞ラジオなどの報道管制が、きびしく、また入国時なども非常に困難だそうであります。つまりビルマは漸次その鎖国政策を強めつつあり、イギリスの技師などをおっぱらったり、医者が足らんで困っておりながら、私共が行く一月位前から、150人ないし200人もインドに追い返したりしているということであります。まあ、そういう風な情勢でありまして、実は、小田部大使には、行った一日の晩と、出発の前日の三日のお昼の二回、お招きを戴いて、いろいろとざっくばらんな御話しやら願ひやらを致しました。結局、私共がはっきり大使にお頼みしてきたことは、ほかの国で仕事をしようということだから、すべての点で自分の思うようにのみ研究ができないことはやむを得ないが、しかし、われわれとしては、あくまでもこのビルマ研究はやり遂げるつもりであるということ、着手が難しいというようなことを聞くとどういふものか、かえってますますやりたくなるというような研究者の気持などを卒直に述べて、大使始め大使館一同の今後の格別の御援助をお頼みしたのであります。もちろんこれには、何よりもわれわれもフレキシビリティを持ち、やると計画したことはあくまでもやり通さねばなりません。決して単なる言葉ではなく、ねばり通さねばな

りません。われわれの努力が短兵急な弾力のないものではなく、われわれの願いがあくまでも真実であるならば、これは必ずやれると信ずるのであります。

現地の事情に就ては、外務省でもわからんことがあり、こうなると、どうしても現地にセンターの出張所のようなものをおいて直接現地の情報をつかむということの必要に迫られるのであります。もちろん全部の国に、かようなものを置くわけにはまいりませんから、比較的交通の便利な、連絡の都合のよい土地に、置くよりほかありません。結局すぐ考えられるのは、交通の便利な、バンコックに一つ、至急そういうものを置いて、現地の状況をにらみながらすぐに仕事を開始するということでありまして。バンコックにリエゾン・オフィスをつくるということについては、バンコックが、航空の要衝に当たっているというほか、大使館、ニポン博士、陳大人などあらゆる便利があるからであります。

陳大人というのは本学の眼科の浅山教授の執刀で網膜剝離の手術をしてもらわれて、失明を助かった中国の華僑で元来清朝の名門であり、浅山教授から紹介状一本だけで、まったく、親身も及ばない世話をして下さった方であります。私は中国の大人のすばらしさのかねてよく知っており、ある意味では、このことも、東南アジア研究のスタートに、私の覚悟を決めさせたものの一つだったとさえ言ってもいいのであります。昭和16年秋、太平洋戦争が始まる前に、私は北京の日華医学大会へ行き、人間としての中国人の偉らさにしみじみ感じ入ったのでありますが、今度はからずも、バンコックで、さらにこの印象を強めたようなことになったのであります。たしかに人間には、国を超え、言葉を超えた、心から心への交わりがあり、たしかに陳大人はそういうものを持っておられ、私は、人間いかにあるべきかを、あらためてこの大人から教えられたような気がいたしました。陳氏はいろいろ仕事をしておられますが、もちろん、バンコックでは一流の人であります。この陳氏が私共の研究に対してできるだけの援助をしよう、オフィスも必要なら、自分のビルディングの一部をすぐ明日からでも貸してあげよう、と言われることは、誠にありがたいことで、いわば浅山教授の余徳が、われわれに及んだのであり、浅山教授にも深い敬意を表したいと思ひます。

先程から申しておりますように、バンコックには理解の深い大使はじめ大使館員一同、ニポン博士、大学関係者、陳大人などがおられるので、バンコックに出張所を設けることは、やろうと思えばすぐにもできることだと思います。どうか一日も早くその方向に進んで、現地での研究に着手してもらいたいのであります。もちろん細かいことは、いずれ、それぞれ委員会でご相談戴かねばならぬことですが、私としては、ここまできたならば、一刻も早く仕事に着手することが大事だと思うのであります。そして日本においてとれないような情報をもとて東南アジア全体の研究をいつも広い視野から考えて行くべきです。すぐビルマに入ることは、先程も申したようにむづかしいことですが、しかし、バンコックを中心として、旅行者としてビルマに入ることはできるそうですから、こんな方法でできるだけの現地の情報を集めて迂回作戦

でビルマの研究にも進んだらよいと思うのであります。日本へ帰って、岩村教授はビルマの様子をくわしく外務省へ報告されましたが、これは外務省もホット・ニュースであったようであります。とにかく仕事を進めるには、現地の情報入手が絶対に必要でありますから、一日も早くバンコックにリエゾン・オフィスを置くことでもあります。なお、ついでながら、コーネル大学もビルマで人類学的研究を行った折も、そのセンターはバンコックに置いておりました。さっきの National Research Council を訪問した時、所長夫妻にもお会いしましたが細かい話は省きます。

それからもう一つ不思議に感じましたことは、さっきも一寸触れましたが、日本で本を読んだだけではピンとこなかったようなことが、ほとんど現地人とは話しもせず、ただ飛行機で飛んだだけでも、現地の空気には、何かわれわれの心にグッと訴えるものがあるということでもあります。そういう経験から、私は将来どのような研究、どのような専門的な、一見他の研究とは殆んど関係がないような研究をされる方も、できるだけ広く東南アジアを見るようにすべきだと思うのであります。日本におると、そんなことをいっても、言葉だけがからまわりするように響きますが、一回出かけて見ると、そういう気持ちになるのであります。どんな特殊な研究をやるにしても、東南アジア全域の動きと、更にはまた世界全体の動きの中における東南アジアの動きを、頭に入れておると、そうでないのとでは、大きな開きが出てまいります。それから現実に即した社会学的な研究をするような場合は、ただ研究室における重箱の隅をほじくるようなことだけではだめだろうと思います。それはなにもただ広く浅くなどということではなく——、広く、浅く、というようなことは、私は本来嫌いであります。私がいうのは、動的にダイナミックに、しかも広い視野に立った総合的思索をもって研究を進めねばならぬということで、人文社会系と自然系の総合的研究というようなものになれば、なおさらそうでありましょう。すべての研究者を東南アジアの全域に廻らすということは、もちろん経費の上から不可能でありましょうが、管理運営委員会などでよく検討されて研究者の全部でなくともまた東南アジア全域でなくても、せめて専攻問題の主任をこれに関係の深い国々へ廻わすぐらいのことは考えねばならぬことと思います。

旅行というと、ちょっと浪費のような印象を与えますが、決してそうではなく、もし廻ってみてただ面白かったというような気持だけなら、その人は研究者たるの資格のない人であります。諸君がお廻りになれば、面白さは面白くとも、同時にまた必ずその前に考えていた何倍かの迷いや、困難などをもお感じになるだろうと思います。それは、ある意味ではそれだけ一步現実に近づいたことにもなるのであります。とにかく、現実をなまのままで攪むということは絶対に必要であります。

研究者の交換についても、ある程度、具体的に意見をかわしてきました。もっともこれは、いずれ委員会などでくわしくご検討になることでもありますから、私はここでは細かいことは申

しあげる必要はないかと存じます。ただ一つここで申しておきたいことは、東南アジア研究というふうな総合的な研究では学問というものを最もゆとりのある考え方でとらえる必要があるということでもあります。たとえば、大学の教授ではないが、研究に対して深い理解と関心を持ち、しかも、タイならタイ、ビルマならビルマ、マラヤならマラヤ、など現地において研究面に対して大きな実力と発言権とを持ち、高い次元における学問の交換を可能ならしめるような人ならば、私はそういう人も交換に値いすると思うのであります。というのはある一つの専門に秀いでておるというだけで、必ずしも総合的研究に適當でないような人があるかと思うと、反対に一つの面だけではそれほどでなくとも、総合的研究に非常に働いてもらえるような特殊の能力を持った人もあり得るからであります。心せねばならぬことは、このたびの東南アジア研究というようなことには、われわれ自身ももっと、もっと、われわれの心を大きくし、人間を大きくせねばならぬ、ということでもあります。

この度の旅行でつくづく思いましたことは、われわれが余りにも東南アジアの実情に暗いということと、長い目で見てわれわれが、どれだけ東南アジアのためになることをしたかということでもあります。どうも、われわれのものの見方は近視的であり、なにか気短かすぎるような感じがしてなりません。たとえば1億円出したらすぐ1億円の効果をねらうというような、なんとなしにそういうふうな匂いがするのであります。一見捨てておるようでも、必ずしも捨てることにはならんという計算の仕方がないようであります。このたびの東南アジアの研究に当っては、われわれは普通の日本人的な考え方をすてて、あらゆる面でもっともっと大きなものを身につけ、人間的な成長をして、現地の自然にも人々にも心からの友情と理解とを持てるようにならねばなりません。しかも、これはほんとうに腹の底からそうならねばなりません。しかし、これは口で言うほど簡単ではありません。実は私もバンコック名物の水上マーケットを見て、身をもってこれを体験して参りました。バンコックは運河がたくさんありますが、水上マーケットというのはメナム河に通ずる運河の一つで行われているもので、いろいろの品物を舟にのせて運び、おたがい同志、あるいは運河の両岸の人々との間で品物を売買する極めて原始的なあきないであります。運河の両側には、ちょうど街道にそうて家が並んでいるように、半分は陸地、半分は運河のほうへと二股かけた特殊な家が密集しておるのであります。そのあいだを毎朝七時から十時ごろまで、行きこう舟で商売をするのであります。そういうところへ行ってみると、はじめは本当にゾッとするのであります。人間のたくましさとか、ヴェイタリティの強さなどといっても、とてもまだ充分には表現できず、やはりゾッとする、というのが、最も現実に近いようであります。

そういうような自然、そういうような人々を相手にして、これから研究をし、生活をしてゆかねばならぬのであります。そこには、現代と古代、原始と文化というものが、あらゆる型で、まったく入り乱れておるのであります。おはぐろをつけた女がいるかと思うと、口紅をつけた

人がいる。カールをした人がいるかと思うと髪ボウボウの人もいるのであります。しかし、不思議にですね、はじめは恐しいような感じに襲われた私ですが、ものの三十分もすると、私の神経は次第に鎮まり、いや鎮まるのみならず、この気候と自然にたいする人間の適応に対して、なんというすばらしい適応かとおのずから頭がさがるのであります。文化の物指しにはいろいろのものがあろうが、ただ現在でき上った型の文化の物指しだけで測って、高等だとか、下等だということには、余程慎重でなければならないのではないのでしょうか。外見のみならず、そのうしろにある心や感情までも共感できる人でなければ、真の批判や評価はむずかしく、一般にある感覚の不感症は、その感覚に対しては発言権はないのであります。ややもすると、われわれは学問の名においてとかく類型化され、規格化され、術語化されて、自己が理解し、感じ得る面のみからしか、ものを見ない傾きがあります。ややもすると、学者に、特にいわゆるすぐれた学者に、こういう不感症的現象がないかを、私は恐れるのであります。水上マーケットの顔は、一見したところ、無表情のような顔で、決して無表情の顔ではなく、注意して見るとひんぱんに、活潑な心の動きがわかるのであります。だんだん時がたつにつれて、もし若かったら、私もこの研究に一生を捧げてもいいなあ、としみじみと思った次第であります。

なによりも現地での研究は、ただの研究室の研究とは、だいぶ趣きの違いがあり、更に人間の大きさ、物指しをも時には変え得る素朴さ、相手の人間に完全にとけきれる弾力性、などいろいろなものが必要であろうと思います。しかし、私は、諸君が現地に行けば、きっと現地のそういう状況にインスパイアされて、そういう巾のひろい広々とした熱情をもたれるようになることを信じて疑いません。

もう一つ今度の旅行で痛切に感じたことは、先程もちょっと触れたように、いつも東南アジアの全域を頭におき、われわれの研究をその一国とか、一部に局限せしめるようなことをせず、文字通りわれわれの研究が、東南アジア全域の総合的研究になるようにと心がけねばならぬということであります。このたび、私が訪れたのは、東南アジアのほんの一部であり、それに私はこういう方面の知識には暗いというよりも、むしろ何も知らぬ人間でありますから、専門的角度からは何も申しあげることにはできませんが、しかし、東南アジアには無限の研究問題があるということは、この身体で感じて参りました。

東南アジアを総合的に研究するということは、なんとしても、私は、日本の学界にかけられた一つの大きな使命だと思います。われわれの第一期計画は五年でありますけれども、五年ぐらいで東南アジアが全部研究できるなどとは、私は夢にも思っていないのであります。この研究によって、ほんとうに、人類の文化に何か一つの新しいものを加えようというには、更に十年、二十年と研究を続けねばなるまいと思うのであります。私は諸君の燃える学問的情熱によって、必ずこの使命を果しぬくよう念じ、また固くそれを信じて、簡単ではありますが今日の報告を終わります。ありがとうございました。　　　　　（8月21日京大楽友会館にて講演）

最後になりましたが、次に各地で御世話になった各位の御芳名を列举して厚く謝意を表したいと思います。

東京銀行香港分行支店長代理	滝川幸雄	ビルマ大使	小田部謙一
三井銀行バンコック支店支店長	太田茂俊	在ビルマ日本国大使館参事官	根本博
東京銀行九龍分行副經理	中山知彦	〃 二等書記官	階堂佳次
三井銀行盤谷支店支店長代理	福井方幹	マラヤ大使	大隈涉
日綿実業株式会社香港支店	友井章	在マラヤ連邦日本国大使館参事官	山下重明
兼松株式会社香港支店支店長代理	津村達雄	〃 二等書記官	有吉巖
住友商事株式会社支店	小塩修一	タイ大使	島津久大
株式会社東食香港支店支店長	柴田善助	在タイ日本国大使館参事官	有田圭輔
東洋麗紙株式会社輸出部曼谷駐在員	荻野晃	〃 一等書記官	山本晃
大阪商船株式会社香港支店	足代清	〔ビルマ〕	
日本貿易幹旋所 (JETRO) 繊維部	久米武夫	Director of Agriculture	Shwe Tha Htwe
Sony Corp. of Hong Kong Ltd. Managing Director	Norio Nakanishi	Office of Education Ministry, Vice-Minister	Hla Han
山口賢株式会社 取締役社長	山口賢治	Univ. of Rangoon, Rector	Maung Kha
山口産業株式会社		Yadanabon Hardware House Ltd., Managing Director	Tin Kyi
株式会社タイ・トーレ・テキスタイル・ミルズ社長	扇原秀治郎	U Ba Thein & Co., Ltd, Managing Director	U Ba Thein
〃 副社長	森田信一	〔香港〕	
〃 常務取締役	小林章	香港珠宝公司副理	張智棠
〃 取締役 総務部長	西野順治郎	香港浙江第一商業銀行	
〃 取締役	鈴木紀正	香港毅誠有限公司董事長	李起東
香港洛友会 (東京銀行)	菊池康	新加坡華僑銀行香港分行副經理	
〃 (香港ジャパン・トレード・センター)	四方緑太郎	〔タイ〕	
〃 (雄昌行)	笹谷哲也	Prime Minister Office,	Vibul Thamavit
〃 (中外貿易)	西尾新揚	National Research Council,	Pradisth
〃 (東商)	吉田瑛之	Deputy Secretary-General	Cheosakul
〃 (日本トレーディング)	服部平吉郎	Thammasart Univ., Secretary-General	Adul Vichiencharoen
〃 (三菱商事)	松浦康	National Research Council,	Netr Khemayodhin
〃 (香港大学留学中)	尾崎雄二郎	Kasetsart Univ., Vice-Rector	Chakr Jotisalikara
在香港日本国総領事館副領事	有地一昭	National Research Council	Nibondh Sasidhorn
〃	駒正春	The Mitsui Bank, Compradore	Jersey Chen
		曼谷信託有限公司總經理	陳秩豊 (敬称略)

平沢総長東南アジア御旅行旅程

昭和38年 7月28日	羽田発	〃	8月5日	クアラ・ルンプール着
〃 7月28日	バンコック着	〃	8月7日	クアラ・ルンプール発
〃 8月1日	バンコック発	〃	8月7日	バンコック着
〃 8月1日	ラングーン着	〃	8月7日	バンコック発
〃 8月4日	ラングーン発	〃	8月7日	ホンコン着
〃 8月4日	バンコック着	〃	8月9日	ホンコン発
〃 8月5日	バンコック発	〃	8月9日	羽田着